



1年の平和を願って年男・年女の皆さんが豆をまきました

願 満

復刊第十一号
2011年 3月
身延別院発行
〒103-0001
東京都中央区
日本橋小伝馬町3-2
Tel 03-3661-3996
Fax 03-3663-2766

一年の安穏願い豆まき

節分会追儼式

立春を目前に控えた二月三日、身延別院で節分の豆まきが行われました。今年も日本橋小伝馬町の当院には一年の幸福と社会の安穏を願う参詣者が多数つめかけました。

本来、節分とは季節の変わり目である「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことをいい、年に四回あります。しかし、春を迎えるということは新年を迎えるにも等しいぐらい大切な節目だったため、室町時代の頃から節分といえば立春の前日だけを指すようになりました。

また、季節の変わり目には邪気が入りやすいと考えられており、新しい年を迎える前に邪気を払って福を呼び込むために、宮中行事として追儼(ついな)という行事が行われるようになりました。その行事の一つ、豆打ちの名残りが「豆まき」のよつです。

なぜ豆をまくのかについては二つの説があります。一つは、大豆には霊的な力が宿るといふ説。その霊的な力を持って邪気を追い払うという考えです。もう一つは、魔の目(魔目「まめ」)に豆を投げつけ、魔を滅する(魔滅「まめ」といふ説です。最近では「恵方巻」と言っている。その年の歳徳神の方角に向かって巻きずしを食べることが、節分の行事として知られるようになりました。これなどはコンビニなどが盛んにPRしているようです。

当院ではこの日、午後一時から、本堂で節分会追儼式が行われ、檀信徒さん約百二十人が一年の安穏を願ってご祈禱を受けました。午後一時五十分ごろから豆まきとなり、住職をはじめ、年男・年女の檀信徒の皆さんが「除災得幸 福は内」と言いながら境内の参詣者に向かって福豆や福銭をまきました。(平山、四面に特集)



真言宗のお寺だったが、日蓮聖人が立ち寄り改宗された

御首題を いただく旅

第十一回 山梨県笛吹市・妙昌寺

宗祖御一泊の霊場で感激の御首題

前回の願満のこのコーナーで私は「法華霊場千か寺参り」修行を昨年七月に成就したことを報告いたしました。法華霊場千か寺参りというのは、文字通り、日蓮宗のお寺を全国一千か寺訪ねて、御首題をいただくものです。実際に達成し終えると、それまでの肩の荷が下りたようで、しばらくは何もしないままに充実感にひたっております。

ところが、私の「千か寺参り」成就は日蓮宗新聞でも掲載され、その読者の皆さんから「平山さん、千か寺で終わりにしないで、二千か寺でも三千か寺でもまわり続けてください」といったお手紙が次々と寄せられました。編集部担当者からも「二千か寺を目指して、お寺めぐりを続けると宣言してください」と言われ、私は「ここまでできたら、できるところまでやってみましょう。二千か寺参りを目指します」と読者の皆さんに約束してしまっただけです。

そんなわけで私は再び気持ちを切り替え、昨年十二月に甲府盆地のお寺を訪ねました。そのうちのひとつ、笛吹市の妙昌寺を訪ねても驚くことができました。

妙昌寺は文永十一年(一二七四年)、日蓮聖人が甲斐の国を歩いてまわられたときに御一泊されたと伝えられるお寺です。当時は真言宗のお寺で



したが、日蓮聖人の教えを受け、時の住職が改宗したのでした。お寺に伝わる日蓮聖人像は、中老僧・日法上人の作と伝えられています。

私が驚いたのは、宗祖御一泊の霊場にふさわしいお寺のたたずまいもさることながら、ご住職が私に書いてくださった御首題です。ご住職は国際平和貢献活動に力を注いでおられ、海外に出かけることも多く、忙しくされている方というふうな事前に他のお寺でうかがっていました。

これからの日本、国際協力のあり方、宗教の可能性などのテーマについて、ご住職は真剣に私に語りかけながら、さらさらと筆を走らせていました。やがて手渡された御首題帳を見ると、日蓮聖人が創出した曼荼羅がしっかりと書かれています。ありませんか。本当にありがたい気持ちになりました。

このようなご住職がいらっしゃる日蓮宗のお寺の奥深さに感動したのでした。

(平山徹・新聞記者)

大きな歓声につつまれた節分会・福引き

二月三日に行われた節分会追儺式。豆まきでは日本橋界隈のサラリーマンやOLさんたちが大勢当院境内につめかけ、本堂からまかれる福豆や福銭を一つでも多く受け止めようと懸命に手を伸ばしていました。中には段ボールの小箱を用意する人の姿も見られました。

豆まきの後は、豪華賞品の当たる福引きが本堂で行われました。年男・年女として申し込みを済ませた檀信徒さんを対象に毎年行っている人気イベントです。

ちなみに商品は、帝国ホテルペア宿泊券、美顔器、デジタルカメラなどの豪華なものです。また今年も富士急ハイランドペア招待券、博多鳥鍋セットなどの賞品が総代から提供されまし

た。さらに、高級清酒、写経セットといった、お上人がたからの提供品も並びました。

抽選機からの番号が読み上げられるたび、賞品を引き当てた檀信徒さんたちからは大きな歓声が上がりました。空くじなしの福引きで、全員が賞品を受け取りました。



ご祈禱を受ける檀信徒さんたち



住職が初めに豆をまきました



節分会の終了後、お札やお供物が檀信徒さんたちに配られました(右)
今年の福引きで1等賞を引き当てた石渡さん(左)

法華経寺・妙法寺へ初詣



妙法寺を参拝した皆さん

初詣・団参に二十五人
身延別院の檀信徒の一行が一月九日、千葉県市川市の総武霊園と中山法華経寺荒行堂、東京都杉並区の堀之内妙法寺を参拝しました。本年最初の団参で新春初詣です。
参加したのは藤井住職はじめ檀信徒の皆さん二十五人。一行は午前九時にマイクロバスで当院を出発しました。
最初に訪れた総武霊園では当院先師のお墓を

参拝しました。続いて訪れた法華経寺は、例年同様、荒行堂の行僧をお見舞いするたくさん
の参拝客で賑わっていました。一行は、当院と縁がある第参行で修行中の神蔵寿観上人(東京・八王子市、法妙寺)に面会し、続いて荒行堂で行僧によるご祈祷を受けました。
法華経寺を出発した一行は午後、妙法寺に到着。祖師堂で厄除けのご祈願をし、境内を案内していただきました。その後、嶋田山主によるお経頂戴を受けました。
天気にも恵まれ、一行は充実した一日を送りました。

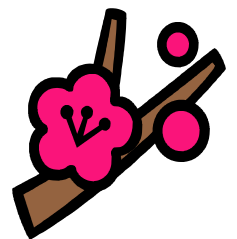


法華経寺の本院の前で記念撮影



国の重要文化財の法華経寺五重塔

当院先師のお墓をお参りました



寺の動き

春季彼岸法要に四十五人

身延別院の春季彼岸会施餓鬼法要が三月二十四日午後一時から、本堂で営まれました。檀信徒四十五人が本堂に集い、提婆達多品などのお経を読み、お題目をあげました。

ご先祖をはじめ、ご縁のあった方々の塔婆をご供養しました。



秋季彼岸法要に集まった檀信徒の皆さん

豆入れ奉仕に十六人



豆入れ奉仕に集まった檀信徒の皆さん(1月19日)

身延別院の檀信徒の皆さんが一月十九、二十日、節分会(豆まき)で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。まかれた豆を参詣者が持ち帰れるように、小さなビニール袋に詰める作業です。

今年は八斗分の豆が用意されました。檀信徒さんたちは、豆を杯で袋に入れる役、袋をホチキスで留める役など、役割を分担しながら手際よく作業を進めていました。

節分会は本年も盛大に行うことができましたが、それも事前に準備をしてくれる皆さんのご

協力があるからです。豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、有澤文子、寺久保トシ子、石渡日出子、北村孝子、石田光子、今井善子、勝見登志子、小島喜恵子、黒石鈴子、相羽泰則、小林康子、丸山定子、甲斐千枝子、平山徹、杉山尊子(敬称略)。ありがとうございました。

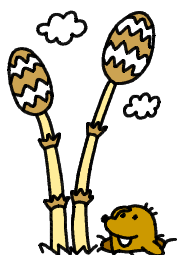
新年祈禱会に二百五十人

身延別院で正月三ヶ日、「願満高祖日蓮大菩薩」御開帳新春祈禱会が厳修されました。当院の新年最初の恒例行事です。

大晦日の夜より門扉を開け、年が明ける夜中の零時から第一回目の祈禱会が始まりました。隣接する十思公園では除夜の鐘が撞かれ、町内の住人が多数訪れていました。

今年も夜中の零時からお参りの人が訪れ、未明の午前二時過ぎまでご祈禱が続けられました。いったん休みをはさんで、午前八時から再び続けられました。

三ヶ日の参詣者は約二百五十人に上りました。参詣者には祈願木札、曆、葛菓子(授与され、住職からお屠蘇がふるまわれました)。



岩手・法華寺の一行が当院を団参

岩手県遠野市の法華寺(住職・阿部是秀上人)の檀信徒の皆さん二十七人が昨年十二月十二日、当院を参拝しました。毎年この時期に参拝いただいているものです。当院と法華寺は非常に縁が深く、住職の阿部上人は当院初代住職の藤井日静上人が身延山法主だったころ、学生として隨身をされていました。その後、当院二世藤井日光上人の時代にもお付き合いは続き、現在三世藤井教公住職にまで及んでいます。また、法華寺の開山に当院初代の藤井日静上人を仰ぎ、その縁の深さを表しています。さらに当院副住職の結婚式の際、仲人をしていただいたのが阿部上人ご夫妻です。



当院を参拝した岩手 法華寺の皆さん

今回、法華寺の檀信徒さんの一行は前日の十一日午後九時に岩手をバスで出発し、十二日午前五時に当院に到着しました。地下ホールで休憩し、朝食をとった後、本堂で願満日蓮大菩薩御開帳と当院初代住職一乘院日静上人、二世妙道院日光上人の御回向を行いました。当院を後にすると、中山法華経寺に向かわれ、荒行堂で今年度の入行僧による加持祈祷を受けました。その後は当院が運営する総武霊園に向かわれ、当院開山の文明院日薩上人、そして一乘院日静上人の墓前で御回向を行いました。また霊園内の妙徳稲荷にも祈願回向をしていただき、岩手に帰られました。阿部上人、また法華寺檀信徒の皆さん、本当にお疲れさまでした。

北海道団参は延期に

今年六月に予定しておりました北海道団参は、東北関東大震災に伴う諸般の状況に鑑み、無期限延期と致しました。なにとぞご諒承をお願い致します。

寛文君信行道場へ

僧道実修生として、昨年三月十三日から身延山で修行生活が続いている藤井住職の二男・寛文君が四月十一日、実修生を修了します。四月十五日からは、日蓮宗の教師(僧侶)となるべく身延山の信行道場へ入ります。五月十九日まで三十五日間の修行です。

今後の予定

- 四月 一日(金) 願満祖師御開帳
八日(金) 花まつり、終日、甘茶供養
十日(日) 十三日講、法要並法話
午後一時より
- 五月 一日(日) 願満祖師御開帳

編集後記

三月十一日に、東北関東大震災とそれに伴う福島第一原発事故という未曾有の災害が起きました。震災被災者や関係有縁の方々を中心に心からお見舞い申し上げます。

当院でも北海道団参を延期いたしました。社会を見渡すと様々な催し・イベントが次々と中止となっております。被災地の皆さんの気持ちを考えると致し方ありません。社会全体は重苦しい空気です。一刻も早く日常を取り戻せるよう祈るばかりです。

今回は「檀信徒さん登場」をお休みし、住職からのメッセージ「大震災に思う」を掲載しました。今こそ心を一つにして、この困難な事態に立ち向かっていきましょう。次回は八月の発行を予定しています。(平山)

大震災に思う

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、マグニチュード九という未曾有の巨大地震が東北地方に起き、その後に来た大津波が東北から茨城までの広い沿岸部を襲った。春の彼岸結日の今日までに死者行方不明者は二万数千人に及び、いまだにその数は増え続けている。まことに痛ましいことだ。震災のために亡くなった方々の冥福を心からお祈りし、被災者の方々の健康回復と一刻も早い被災地復興を一心に祈念する。

深刻なことは、その地震と津波のために福島第一原子力発電所の一号機から六号機までが大きな被害を被ったことだ。これによって原発から放出された放射性物質が空中を漂い、土壌に入り、農作物に付着し、水を汚染している。事態はいまだ現在進行中で予断は許されない。現場で昼夜を分かたず復旧作業に当たっている人々の、文字通り命懸けの努力が一日でも早く実を結ぶことをひたすら祈るばかりである。

戦後以来の国難

このたびの大震災は、日本にとって戦後以来の国難ともいべきものだ。アメリカ力を初めとする多くの諸外国からも支援の手が差しのべられ、今、救援活動に当たってくれている。海外メディアは地震と津波の映像を流し続け、このような大惨事に遭遇しても日本人はパニックにも陥らず、略奪や騒擾もなく、整然と秩序ある行動を取っていると絶賛している。

筆者の尊敬する友人であるフランス国立高等研究院のロベール教授夫妻からお見舞いのメールがきたが、それには、「フランスに限らず、世界の人々が、日本人の、災害を前にしての泰然とした態度に感服すると同時に、そうした態度はいった

いどこから来ているのだろうか、仏教から来ているのだろうか、ロベールは日本学研究者の一人としてフランスの幾つかの新聞社から記事、インタビューを依頼されています」とあった。

日本人の秩序と礼儀正しさ

また、日本にいて阪神大震災を経験したニューヨークタイムズ元東京支局長ニコラス・クリストフ氏が、大地震の翌日、同紙に寄せた応援メッセージ「日本への同情、そして敬意」(Sympathy for Japan, and Admiration)によれば、次のようにある。

痛ましい地震の後、今日、我々の思いは日本人の人々と共にしている。日本史上最悪の地震。しかし、一九九五年の阪神大震災を経験したものでして、私はこう付け足したい。「今後数日、数週間、日本を見ていよう。私たちはきつと何かを学ぼう」と。(中略)

日本にいた間、私はしばしば日本人の秩序と礼儀正しさに感動していたが、神戸の震災後ほどその思いが強くなったことはない。神戸空港がほぼ全壊し(藤井註:神戸空港は震災後の完成)、街中の商店のガラスが割れていた。私は略奪や救援物資をめぐる争奪をスクープしようと街中を探し回った。ようやく、二人組の男に強盗に入られたという店主に巡り会えた。私は少し大げさにこう尋ねた。「同じ日本人が、自然災害を利用して犯罪に走ることに、驚きはありませんか?」店主は驚いた顔で「誰が日本人だと言った?彼らは外国人だったよ」と答えた。(中略)

日本の回復力と不屈の精神に、気高さや勇気を感じる。世界もまもなくそれを目の当たりにするだろう。これはまた、綿密に編み込まれた日本の社会組織、彼らの強さと回復力が、輝きを放つときでもある。日本人は必ず力を合わせてくれると私は信じている。その姿は、分裂と口論と私利私欲にかられたアメリカの現状とは対照的と言えよう。私たちは日本から学ぼう。私たちは日本

を思い、そして、この痛ましい地震を経験した日本に深い同情と、深い敬意を表したい。》(大紀元日本三月十八日)【翻訳・張凜音】

今こそ心を一つに

いくら日本人でも大災害に遭遇して冷静に普段通りの心持ちでいられる人はいない。人は自分が大災害に遭うか遭わないかは予知できない。不運にして遭い、自分の家族肉親を喪った人、住む家までも流されてしまつて避難所生活を強いられる人たち。この人々の悲しみと落胆とはいかばかりであろうか。

しかも地震国日本に生きていれば、この難はいつても誰もが被る怖れがあるものだ。今回は東北地方が中心だったが、今度は関東大震災が、東海大地震が、あるいは富士山大噴火が起こるかも知れない。だから、私たちは大災難に遭つてからの心がけ、振る舞いが大事なのだ。幸いにして被害に遭わなかった人は被災者に対して憐憫と同情の心を起こして救援の手を差し伸べ、被災者は被災者同士でいたわりと互いに励ましを心をもつ。このことが大事であろう。そうすれば人の災難の隙を突く火事場泥棒のような卑劣な犯罪や、我先にと救援物資を奪い合うような利己的な行動は取れるはずがない。日本は先の阪神大震災の時に大勢の若い人がボランティアとして救援に赴いた。そして今回もボランティア活動があちこちで展開されている。こういう自己犠牲を伴う他者救済の行いは最も高貴だ。ふだんは年寄り世代からあれこれ言われている若い世代から、このような気高い行為が自然発生的に出てくるのが日本の底力であろう。

大聖人の仰せのごとく、「異体同心なれば万事を成し、同体異心なれば諸事叶う事なし」(「異体同心事」)と、私たちは今こそ心を一つにしてこの国難に当たろうではないか。

住職 藤井 教公